

聖書: エステル記3章7～15節

説教: 散らされた民族

はじめに

エステル記は、南王国ユダの人々が補囚となって外国へ強制移住させられてからおよそ百年後のペルシャ帝国が舞台です。モルデカイは異国の地で生まれ育ちながらそれでも信仰を守り続け、養女として引き取ったエステルも聖書を教えながら育てました。ペルシャはもともと多民族国家であったということもあり、信仰についてはかなり寛容だったようです。ところが、ハマンという人物が王の側近に抜擢されたとき、事態は急変します。かつてモーセが申命記で、「アマレク人はイスラエルが荒野を旅していたときに、弱っていた人たちを狙って襲いかかり、かすめ奪って殺した。だからあなたがたは、アマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない」と語っていたそのアマレク人。ハマンがそのアマレク人の子孫であることを知ったモルデカイは、たとえ王の命令に背くことになろうともハマンに対して頭を下げようとしません。これが事件の発端となりました。プライドを傷つけられたハマンは怒り狂い、モルデカイだけを処分するのではなく、ユダヤ民族全体を根絶やしにしなければならないと決心した。それが前回までのあらすじです。

今日のところでハマンが着々と計画を進め、その結果ユダヤ人の間で大混乱が起きていくまでの様子が描かれています。ハマンとはどのような人物であったのか。神はなぜユダヤ人が苦しむことをあえてお許しになるのか。そのことを考えていきます。

1 ハマンの策略

1) 散らされた一つの民族がある

ハマンはペルシャ帝国の王に見いだされて、他の大臣を飛び越えて王の側近に大抜擢された人物ですから、非常にすぐれた知性と手腕を持っていたと思われまします。そのような人物が、王に対してどのようなことばを語ったのか。いくつか注目します。一つ目。8節前半。「王国のすべての州にいる諸民族の間に、散らされて離れ離れになっている一つの民族があります。」「散らされて離れ離れになっている一つの民族」とは、いうまでもなくユダヤ民族のことです。ところが、なぜかハマンは直接ユダヤ民族とは言わずに、「一つの民族」とあいまいな言い方をします。王がもともとユダヤ人に

対して悪い感情をもっていたというのであれば、「ユダヤ民族」と言った方が王を説得するには効果的はずです。あえてそうしないということは、王がユダヤ人に好意的な感情を持っていたことになる。

その証拠があります。6章10節。王はあるとき眠れない夜を過ごすために、公式文書を読み直す。そうすると、モルデカイが過去に王の暗殺計画を事前にキャッチして王が難を逃れることができた、そのときに詳しい記録が書いてるのを読んで、モルデカイに褒美を取らせなければいけないと思立ちます。そのとき王はこう言うのです。「すぐ王服と馬を取って来て、王の門のところに座っているユダヤ人モルデカイにそのようにしなさい（着せなさい）。」

王は、「ユダヤ人モルデカイ」とわざわざ言うくらい、ユダヤ人のことをひいきにしている。そのユダヤ人を根絶やしにしようとするのですから、王の前では具体的な民族の名前は出せない。それで「一つの民族」と言ってあいまいにする。実にことばの使い方が巧妙です。

2) 王の法令を守らない

二つ目。8節後半。「彼らの法令はどの民族のものとも違っていて、王の法令を守っていません。彼らをそのままにさせておくことは、王のためになりません。」

王が、誰でもハマンに頭を下げるようにと命じていたのに、モルデカイだけがモーセの律法に従って頭を下げようとしなかったのですから、確かにハマンの言っていることは間違いではない。では真実だと言えるかどうか、よく考えなければならぬ。モルデカイがハマンに頭を下げないことと、それが王のためにならないということと結びつけようとしています。これは正しいことなのでしょう。見なければならぬのは、本当の動機です。なぜこのようなことをするのかといえば、元をたどればハマンのプライドが傷つけられたからです。「王のためになりません」というのは、後からとってつけた理屈に過ぎないのです。

先週、子どもメッセージで「神の国とその義とをまず求めなさい」というみことばを読みました。神の義とはなにか、難しいと思うかもしれませんが、反対のことを見るとわかりやすい。真実を覆い隠すためにことばをすり替える。ハマンのし

ていることこそが、神の義に真っ向から反することなのです。

3) 銀一万タラントで

熱心に計画を語るハマンは、王があまり興味を示さないことに気がついたのでしょう。最後のもう一押しをする。この計画を実行するための費用に関しては、すべて自分が負担し、残った物は王の宝物庫に納めると提案する。もちろん自分で負担するつもりはありません。ユダヤ人から没収した財産で埋め合わせできると踏んでいます。

政治はやはり予算ですから、お金がかからないなら拒否する理由はない。「すべてはお前に任せろ」ということになり、王の指輪で印が押された法令が全国に発布されていきます。

ハマンが出した法令は次のようなものでした。

13節。「書簡は急使によって王のすべての州へ送られた。それには、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日の一日のうちに、若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあった。」

一日のうちにすべてのユダヤ人を根絶やしにし、家財をかすめ奪えというのですから、本当にひどい話です。ところが、法令の中身については王は何も知らなかったようです。二人が城の中で酒を酌み交わしていたとき、国中のユダヤ人は大騒ぎになります。

2 散らされた民族

1) 補囚の民となったユダヤ人

これがハマンのしたこと。ではこれを神の視点から見たらどうなるでしょう。ハマンはユダヤ民族のことを「散らされて離れ離れになっている一つの民族」と言いました。彼らを根絶やしにしても、取るに足りないつまらない民族、そのような印象を持たせるためにこんなことを言ったのでしょう。でも、それはある意味では正しいことでした。ユダヤ人が散らされてしまったのは、ひとえに神を見捨てて異教の神々であるバアルを拝み、神が送った預言者を通してたびたび警告してもこれを無視し、かえって預言者たちを迫害して殺した。そのようなユダヤ人の罪の結果、散らされて離れ離れになってしまったのです。

2) 律法を守る

そんなふうにしてユダヤ人は祖国を失い、人の目には取るに足りない民族にしか見えなくなっていく。

では本当に取るに足りなくなっただけかというところではない。モルデカイはなおも信仰を捨てず、自分はユダヤ民族の一員であることを公に語り、たとえハマンの怒りを買おうとも、聖書のみことばを守ることにこだわる。取るに足りない民族であるはずなのに、ハマンに「彼らの法令はどの民族のものとも違って」と言わせるほど、彼らの信仰は際だっていた。そのことが、他の民族にはユダヤ人が閉鎖的で不可解な人たちという印象を与え、差別の対象となり、今でも「ユダヤ陰謀論」のような話を信じる人たちが後を絶たないのです。

3 なぜ神はこのようにことを許すのか

1) ハマンは特殊な人間だったのか

ハマンのやり方を見て、彼はまれに見る血も涙もない極悪非道な人物で、特殊な人間だったのではと思うかもしれません。そうではありません。ドイツのナチス政権が推し進めたユダヤ人虐殺計画いわゆるホロコーストの中心的な働きをしたアイヒマンという人がいました。戦争が終わると、彼は南米に逃亡するのですが、隠れているところを捜し出され、イスラエルに連行され裁判が始まる。さぞかし冷酷な悪人だろうとみなが予想した。ところが、家では妻や子どもを愛するどこにでもいるようなごく平凡な男に過ぎなかったことを知って世界は驚いたと言われています。ハマンが特別ひどい人間なのではありません。だれもがこのような性質をもっていると考えなければなりません。

2) 人の罪があらわにされていく

このことについてイエスはこう言っています。マルコの福音書7章21～23節。「内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」

ハマンはひどい人間だ、自分とは関係がないと言いたくなるかもしれませんが、でも神はそうはご覧にならない。実際に行ったかどうかではなく、たとえ心の中で思っただけであなただけは罪を犯したことになるのです。ですから、ハマンも私たちも区別はない。みな罪人なのです。おそらくハマンも家に帰れば、一人の夫であり父親にすぎなかったのかも知れない。でも、権力を握ったとき、彼はいつも簡単に心の中に思っていることを実行できる

立場になった。そのとき、心の憶測に隠れていた恐ろしい罪があらわになっていくのです。

3) 神の救い

神は罪のなから私たちを救い出そうとされます。どのようにしてでしょうか。この後、モルデカイがどうしていくのか。エステルが何をしなければならなかったのか。そこから神の救いが見えてきます。モルデカイは、自分の娘のように育てたエステルに、こう言うのです。4章14節。「もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

ユダヤ人がこの苦しみから救われていくために、エステルは逃げることはできない。あなたは自分のいのちをかけて王の前に出て、王に助けを願わなければならない。これを言うときモルデカイはどれほどつらかったか。これを聞かされたエステルはどれほど衝撃を受けたか。でもエステルは、自分のいのちを捨てて同胞のユダヤ人を救うのだと決心していくのです。エステル記には、神という名前も出なければ、もちろん救い主のことも出てこない。けれども、この二人が通っていった苦しみ道をとおして、私たちの救い主であるイエス・キリストの救いが浮かび上がってきます。